

総括講演

アクティブラーニング型授業の推進と展開・課題

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

(桐蔭学園 教育顧問)

<http://smizok.net/>

E-mail mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp

今日の講演スライドを溝上ウェブサイトアップしていますので、必要な方はダウンロードしてください

大学教育学会課題研究(2015-2017年)

1. 課題:「アクティブラーニングの効果検証」
2. 研究代表者:溝上慎一
3. 研究組織

研究メンバー	所属	役割
溝上慎一	京都大学教授	研究統括、[1]調査票作成、授業の量的分析
森 朋子	関西大学教授	[1]調査票作成、授業の質的分析
三保紀裕	京都学園大学専任講師	[1]調査票作成、授業の量的分析
本田周二	大妻女子大学専任講師	[1]調査票作成、授業の量的分析
山田嘉徳	大阪産業大学講師	[1]授業の質的分析
紺田広明	関西大学特命助教	[1]データ整理、授業の量的分析
山田邦雅	北海道大学准教授	[2]フリーライダー、主体率測定
長澤多代	三重大学准教授	[3]授業外学習としての学習環境分析
研究協力者	所属	役割
林 透	山口大学准教授	研究協力
関田一彦	創価大学教授	研究協力
高橋哲也	大阪府立大学教授・学長補佐	研究協力
川越明日香	長崎大学助教	研究協力

科学研究費基盤研究(B)(一般)(H28-H30)「学習成果に結実するアクティブラーニング型授業のプロセスと構造の実証的検討と理論化」(溝上慎一(代表):課題番号16H03075)の助成を受けておこなわれている。

組織協力：

- 大阪府立大学
 - 山口大学
 - 長崎大学
 - 東京理科大学
 - 京都外国語大学
 - 京都光華女子大学
 - 京都光華女子大学短期大学部
 - 創価大学
 - 産業能率大学
 - 明海大学
 - 愛知文教女子短期大学
 - 淑徳大学
-
- 2015-2017年度前期
 - ✓ 20大学183のAL型授業
 - ✓ プレ・ポスト調査で紐付けた受講者数9,691名

ご協力くださった大学・教員に心より御礼を申し上げます

川添 充(大阪府立大学) 高山 努(大同大学)
小山 理子(京都光華女子大学短期大学部) 久田 晴生(大同大学)
関田 一彦(創価大学) 佐藤壮一郎(大同大学)
望月雅光(創価大学) 長谷川 元洋(金城学院大学)
林 透(山口大学) 畔田 博文(石川工業高等専門学校)
阿濱 志保里(山口大学) 大黒 章子(明海大学)
杉田 一真(産業能率大学) 鈴木 敦(茨城大学)
村上 正行(京都外国語大学) 小林 勝年(鳥取大学)
北島 茂樹(明星大学) 布柴 達男(国際基督教大学)
小林 和広(島根大学) 吉田 美登利(学習院大学)
小俣 光司(島根大学) 吉田 美登利(関東学院大学)
宗村 広昭(島根大学) 松下 聖子(名桜大学)
平川 正人(島根大学) 鈴木 聡(大阪経済法科大学)
山田 泰寛(島根大学) 西澤 早紀子(愛知文教女子短期大学)
奥田 阿子(長崎大学) 白井 伊津子(淑徳大学)
川越 明日香(熊本大学) 寺井 朋子(武庫川女子大学)
山田 剛史(岡山大学) 矢野 浩二郎(大阪工業大学)
満田 節男(東京理科大学) 杉原 真晃(聖心女子大学)
津吹 達也(キリロム工科大学) 山田 邦雄(北海道大学) ほか
松尾 美香(岡山理科大学)
西屋 克己(関西医科大学)

島根大学・東京大学を中心とした 反転授業プロジェクト (FLIT) から始まりました。 (Since 2013年)



FD研究会
授業の常識をひっくりかえす！
反転授業
Flipped Classroom
を考える

lecture seminar

今年度より、島根大学ではFLIT（東京大学教育科学部 反転授業社会連携プロジェクト）が主催する「反転授業（Flipped Classroom）プロジェクト」を開催しています。「教える」と「学ぶ」のバランスを考えた、最新の授業で実践中です。本研究会では、同じく多くの実践が展開されている全国の大学と連携し、その発展と普及についてディスカッションを行います。高橋誠一氏を主賓として、学際研究者の参加が期待される山形県長平氏（東京大学/FLIT）と村上第一氏（京都大学）をお迎えします。

2014 2.12 wed

15:30~19:00

島根大学 松江キャンパス、国際棟3階多目的室
（島根県立労働センター100号）
島根大学 教育科学センター、山形地区FD連携協議会
山形地区ソーシャルラーニングセンター
東京大学反転授業社会連携講座 (FLIT)
島根県教育委員会、島根県教育委員会

プログラム program

15:30-15:40	開会挨拶 （島根大学学務長・学術部長 村上第一氏）
15:40-15:50	高橋誠一氏 （東京大学 教育科学センター 長 高橋誠一氏）
15:50-16:35	高橋誠一氏による講演 （東京大学 山形地区）
16:35-17:20	高橋誠一氏による講演 （島根大学 松江第一校）
17:20-17:30	休憩
17:30-18:10	質疑応答 （山形大学、島根大学）
18:10-18:55	ディスカッション
18:55-19:00	閉会挨拶

お問い合わせ 島根大学 学務課 全学共通教育担当
TEL. 0852-32-6053
epd-kkikaku@office.shimane-u.ac.jp
http://oed.shimane-u.ac.jp/
参加のお申込みはこちらから <http://www.leaf.shimane-u.ac.jp/enquete/no/hanten1>
※申込期：2014年2月3日(日)

2014年2月12日開催：島根大学他主催・東京大学反転授業社会連携講座 (FLIT) 共催
「授業の常識をひっくりかえす！反転授業」



- ✓ 森朋子・溝上慎一（編）(2017). アクティブラーニング型授業としての反転授業 [理論編] ナカニシヤ出版
- ✓ 森朋子・溝上慎一（編）(2017). アクティブラーニング型授業としての反転授業 [実践編] ナカニシヤ出版

本日ご登壇の学校、先生方に御礼を申し上げます。

大学側発表者

- 関田一彦(創価大学)
- 奥田阿子(長崎大学)
- 小林和広(島根大学)
- 小山理子(京都光華女子大学短期大学部)
- 田上正範(追手門学院大学)
- 多田泰紘(関西大学)
- 千葉美保子(関西大学)
- 山田嘉徳(大阪産業大学) ほか

高校側発表校

- 桐蔭学園中学・高等学校
- 花園学園中・高等学校
- 帝塚山学院中・高等学校
- 大阪府立岸和田高等学校
- 山形県立庄内総合高等学校
- 静岡市立5校(静岡市立高等学校、清水桜が丘高等学校ほか)
- 長崎県立長崎東高等学校
- 神奈川県立港北高等学校

9/30
開催決定!

アクティブラーニング型授業 高校と大学による事例報告会

@関西大学梅田キャンパス

アクティブラーニング型授業効果検証プロジェクト(代表 溝上慎一)では、2014年度より大学を中心にAL型授業の効果検証をおこなっています。本報告会ではプロジェクト協力者とそこで得られた知見を共有するとともに、今後の高大接続を視野に入れて、高校のAL型授業の事例も報告します。会場の都合上、定員120名の限定となりますので、ご希望の方はお早目にお申込みください。

日にち: 2017年 **9月30日(土)**
時間: **13:00~17:30**
プログラム:

- 開会の挨拶 森朋子(関西大学)
- AL型授業の効果検証 ~中間成果報告~ 紺田広明(関西大学)
- 大学からの実践報告 関田一彦(創価大学)
- 高校からの実践報告 佐藤透(桐蔭学園)
- ポスター発表と交流

大学側発表者: 奥田阿子(長崎大学)、小林和広(島根大学)、小山理子(京都光華女子大学短期大学部)、田上正範(追手門学院大学)、多田泰紘(関西大学)、千葉美保子(関西大学)、溝上慎一(京都大学)、山田嘉徳(大阪産業大学)

高校側発表校: 花園学園中・高等学校、帝塚山学院中・高等学校、大阪府立岸和田高等学校、山形県立庄内総合高等学校、静岡市立5校(静岡市立高校、清水桜が丘高校ほか)、長崎県立長崎東高等学校、神奈川県立港北高等学校

- 総括講演 溝上慎一(京都大学)
- 閉会 森朋子(関西大学)

場 所: 関西大学梅田キャンパス(大阪駅/梅田駅から徒歩5分)
参加者: プロジェクト協力者およびAL型授業に興味がある学校教育関係者
定 員: 120名(先着順となります)
後 援: 関西大学教育推進部
申し込み: <https://reas2.code.ouj.ac.jp/reas/q/50422>

*本研究会は、大学教育学会からの課題研究助成(H27~H29)「アクティブラーニングの効果検証」(代表者:溝上慎一)、科学研究費基盤研究(B)(一般)(H28~H30)「学習成果に結実するアクティブラーニング型授業のプロセスと構造の実証的検討と理論化」(溝上慎一代表:課題番号16H03075)の助成を受けておこなわれています。

【問い合わせ先】森朋子(関西大学) morit@kansai-u.ac.jp



本日の内容

- アクティブラーニングの理論と施策の展開(復習)
- AL研究プロジェクト(大学)から明らかになったこと
- 高校のAL型授業の推進を見て

ウェブサイト「溝上慎一の教育論」

<http://smizok.net/education/>

ほか【講話】もあります。是非お読みください。

- ✓ 「アクティブラーニングとアクティブ・ラーニングの違い、なぜカタカナ？」
- ✓ 「アクティブラーニングはなぜグループワーク、プレゼンテーションを強調するか」
- ✓ 「外化なしの学習は思考力育成を放棄しているに等しいー外化としてのアクティブラーニングの意義」
- ✓ 「教育関係者は施策の「社会が変わった」という説明を繋げて理解していない」
- ✓ 「まなボードがあるとグループワークが進むのはなぜか？ー認知カップリングの考え方」 など



本日の内容

- アクティブラーニング理論と施策の展開(復習)
- AL研究プロジェクト(大学)から明らかになったこと
- 高校のAL型授業の推進を見て

まずアメリカで

- アクティブラーニング (active learning) : 大学の大衆化、学生の多様化を背景に、1980～1990年代初頭において、米国で提唱・概念化されてきた教授学習の理論。
- 単なる教育学習の方法以上のものである。
cf. 学習パラダイムへの転換、学校から仕事・社会へのトランジション(移行)



Harvard University (USA)



Massachusetts Institute of Technology (USA)



Quest University Canada(CA)

講義型授業からアクティブラーニング型授業へ



講義 + 講義



演習

Seminar/Tutorial

講義 + アクティブラーニング (AL) = **アクティブラーニング型授業**

(聴く) (書く・話す・発表する)

(認知プロセスの外化: 知覚・記憶・言語・思考など)

傘概念 (umbrella term)

2

including 協同学習、ジグソー法、PBL、LTD話し合い学習法など

10

Further Readings 溝上慎一の教育論 <http://smizok.net/education/>

✓ 「(理論)大学教育におけるアクティブラーニングとは」

質的転換答申でのALの説明

- 日本では、1990年代半ばより参加型授業の名のもと、(今でいうところの)アクティブラーニングの原初形態が徐々に普及し始めた。
- 『学士課程答申』(2008年)で、学士課程教育における「教えるから学ぶへ (from teaching to learning)」の教授学習パラダイムの転換が、さまざまな観点のもと施策化された。
- 『質的転換答申』(2012年)で、「アクティブ・ラーニング(能動的学修)」が施策用語となり、単位制に基づく学修の質的な充実化がはかられた。

アクティブ・ラーニングとは:

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、**認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る**。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によっても取り入れられる。

- 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へー(答申)』(2012年8月28日)

学力の三要素と習得・活用・探究

● 学力の三要素

(学校教育法第30条2)(2007年改正)

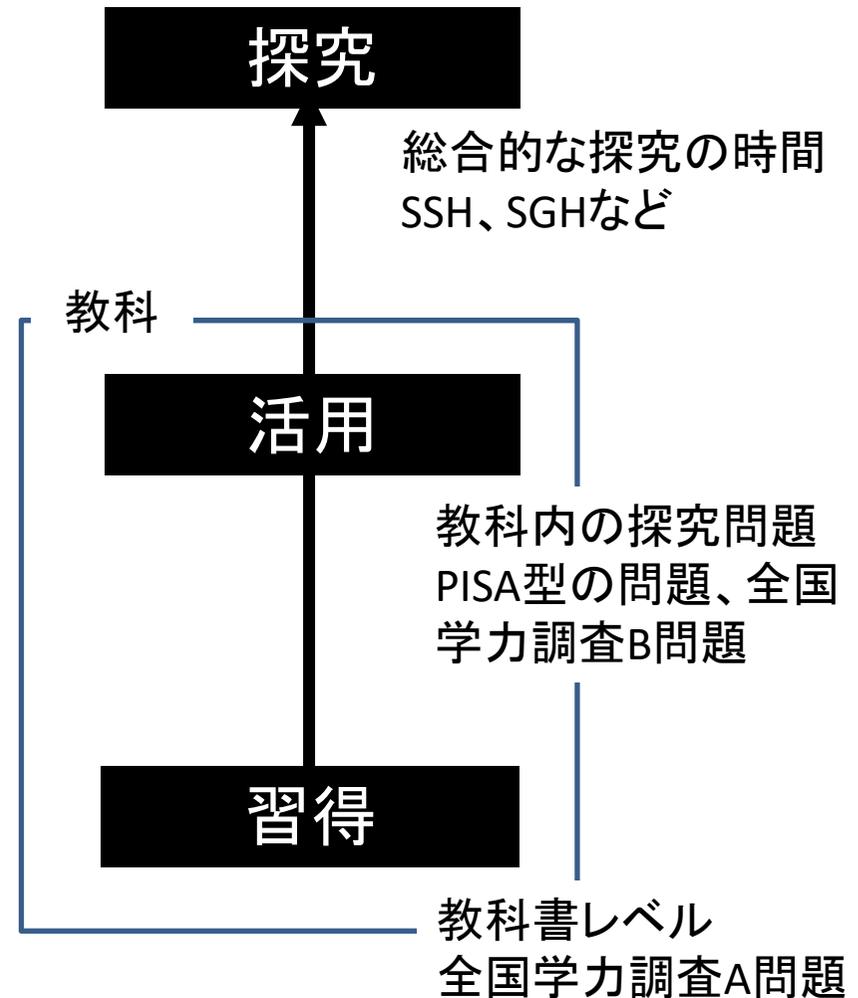
- (1)基礎的な知識・技能
- (2)思考力・判断力・表現力等
- (3)主体的に取り組む態度

今日の講演・ポスター発表を見る視点

- ✓ 習得 — — — 探究
- ✓ 資質・能力の育成
- ✓ 主体的・能動的な態度の育成

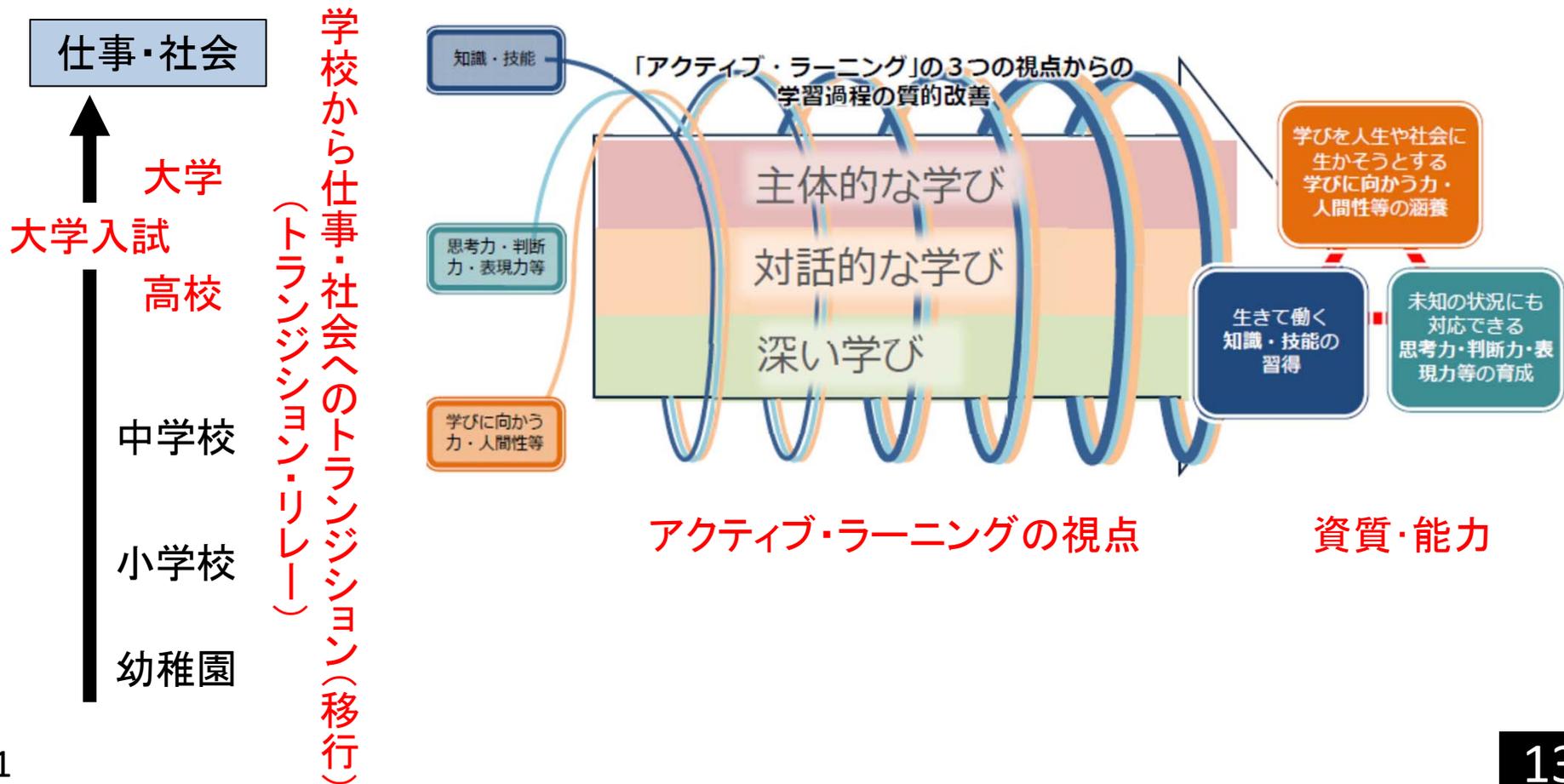
● 学習プロセス

習得—活用—探究



高大接続改革から展開する学習指導要領改訂 「アクティブ・ラーニング」「資質・能力の育成」

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』(2016年12月21日)



Further Readings 溝上慎一の教育論(理論) <http://smizok.net/education/>

- ✓ 「大学教育におけるアクティブラーニングとは」
- ✓ 「初等中等教育における主体的・対話的で深い学びーアクティブ・ラーニングの視点」

学校教育の社会的機能の見直し

- 雇用構造の変化(正規・非正規雇用、日本的雇用の衰退、一般化する離転職など)
- 情報化・グローバル化、人口減少に伴う多様化
- 学校から仕事・社会へのトランジション(移行)課題
- 人工知能(AI)



学校から仕事・社会へのトランジション(移行)



ひとり個人の専門的スキル・知識だけではダメだ。
組織の中での思考・コミュニケーション・問題解決等が必要だ

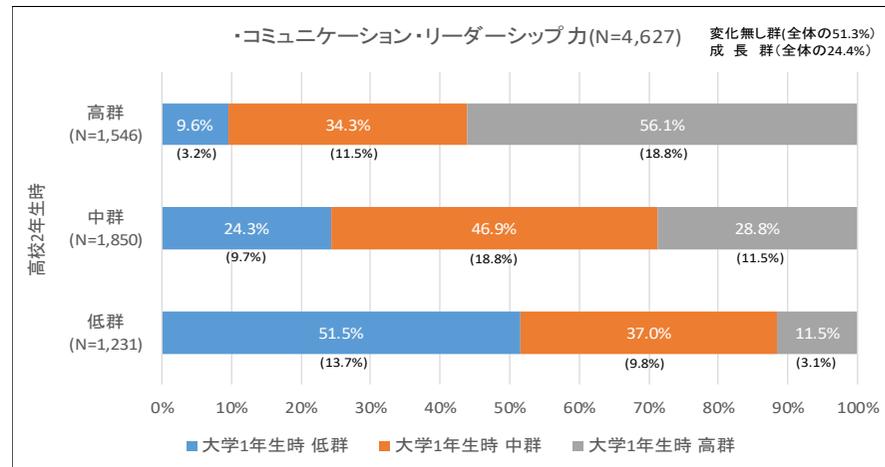
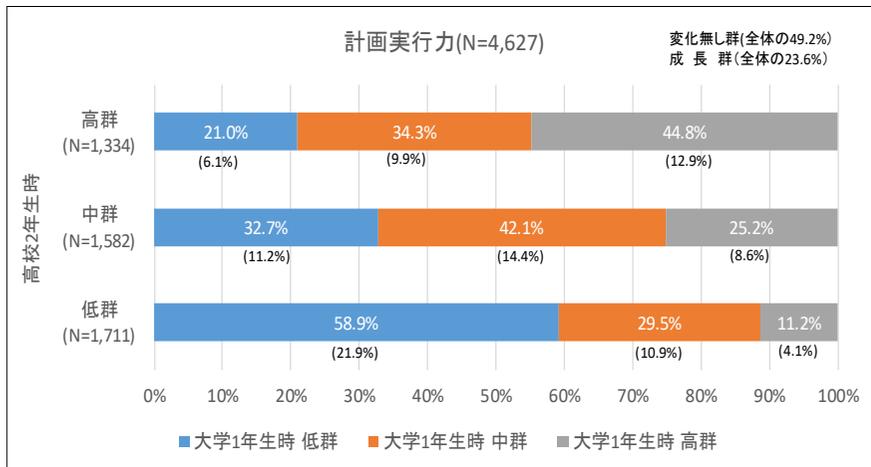
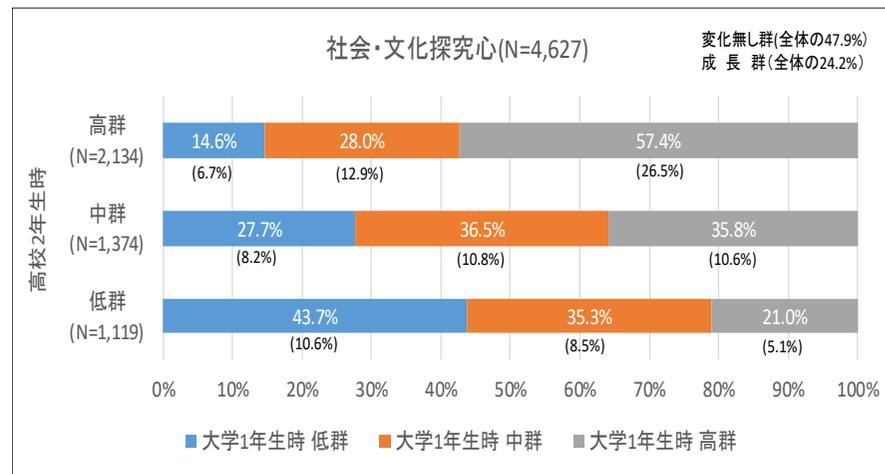
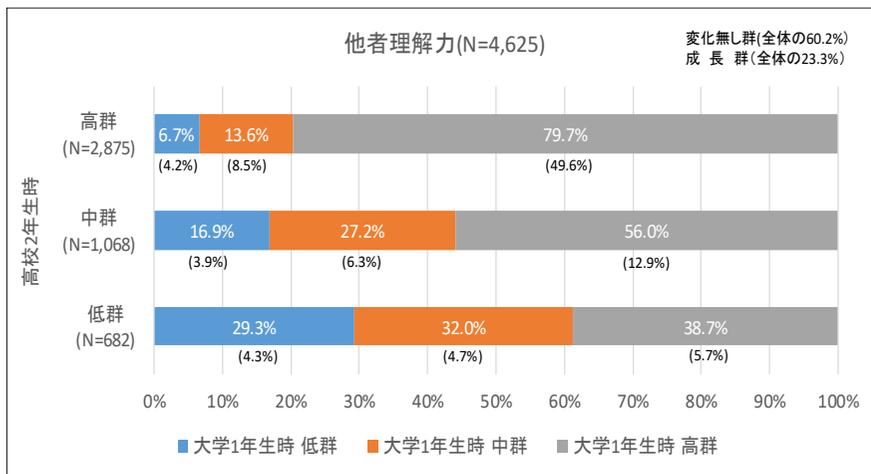


製菓会社



食品会社

半数の者は高校から大学にかけて資質・能力は変わらない 京都大学・河合塾「通称10年トランジション調査」より

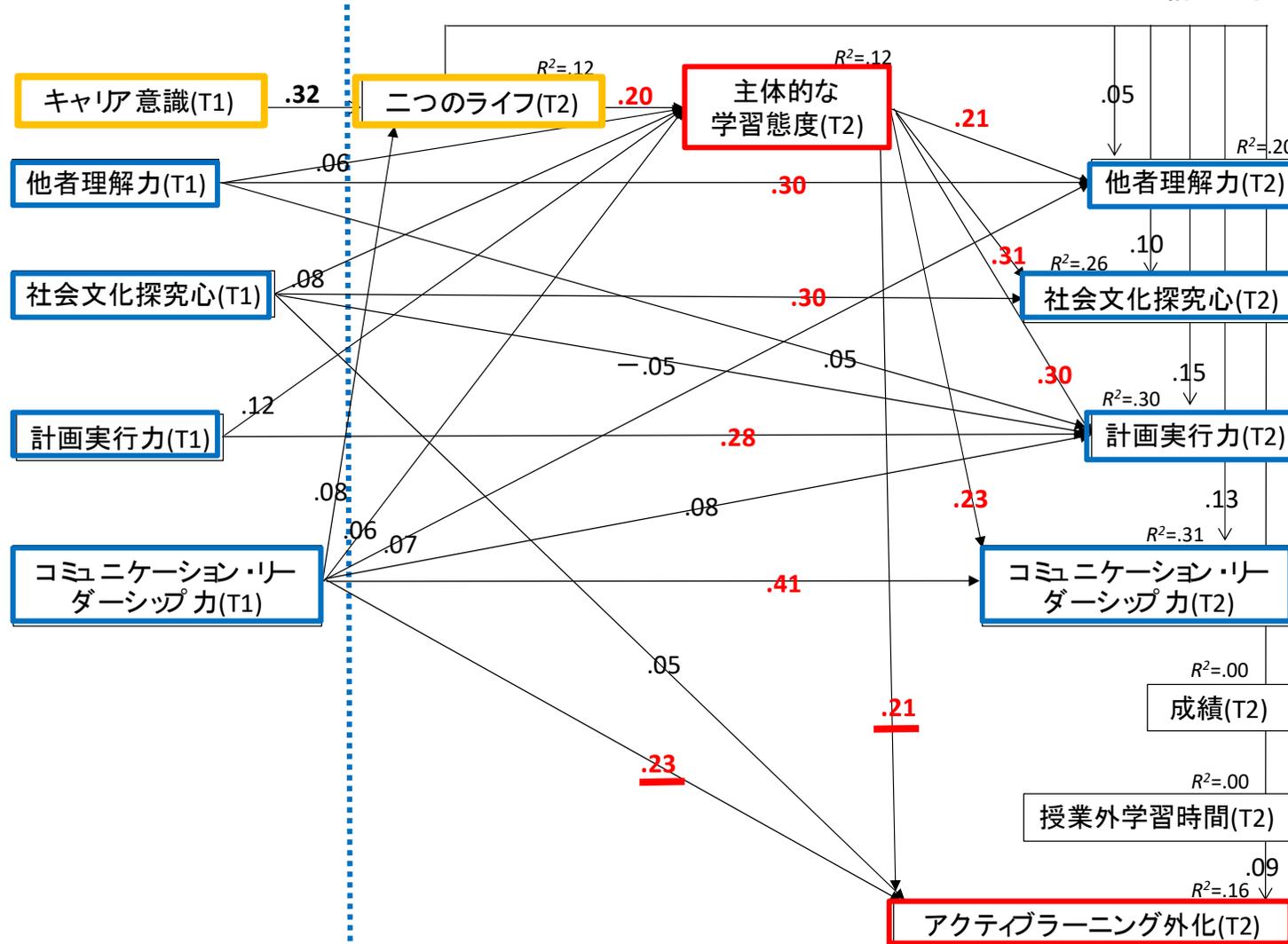


「変化無し群」を高→高、中→中、低→低とすると、**変化無し群は全体の47-60%**であった。これより、高校2年生の時の資質・能力は変化しにくいことが明らかとなった。また、「成長群」を低→中or高、中→高とすると、**成長群は全体の23-24%**であった。

共分散構造分析

構造方程式モデル

仮説通りの結果
キャリア、学習、対人関係の重要性



1時点目 (2013年)
高校2年生(11-12月)

2時点目 (2015年)
大学1年生(11-12月)

本日の内容

- アクティブラーニング理論と施策の展開(復習)
- AL研究プロジェクト(大学)から明らかになったこと
- 高校のAL型授業の推進を見て

アクティブラーニング(外化)尺度の開発

尺度の構成要素。12項目作成

- ✓ 外化 「議論や発表の中で自分の考えをはっきり示す」
- ✓ 外化－気づき 「クラスメイトの考えが自分と異なることに気づく」
- ✓ 外化－内化 「議論や発表を通じて授業の内容についての理解が深まる」



Reference:

- 溝上慎一・森朋子・紺田広明・河井亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳 (2016). Bifactorモデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発 京都大学高等教育研究, 22, 151-162.

「外化」はグループ変数として抽出される

次元	項目No.	項目	一般因子	グループ因子1	グループ因子2	共通性
外化	AL1	議論や発表の中で自分の考えをはっきり示す	.596	.482	-.015	.589
外化-気づき	AL2	クラスメイトの考えが自分と異なることに気づく	.724	.133	.148	.564
外化-内化	AL3	議論や発表を通じて授業の内容についての理解が深まる	.807	.094	-.103	.671
外化	AL4	根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う	.615	.625	-.003	.770
外化	AL5	クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える	.653	.462	.013	.641
外化-気づき	AL6	クラスメイトの異なる意見を知って刺激を受ける	.802	.003	.119	.658
外化-気づき	AL7	議論や発表を通じて自分の考え方に間違いがあると気づく	.725	-.006	.342	.643
外化-内化	AL8	議論や発表を通じて授業の内容に関する知識が増える	.842	-.040	-.114	.723
外化-内化	AL9	議論や発表を通じて自分が何を考えていたのかを理解する	.769	.099	-.010	.602
外化-気づき	AL10	議論や発表を通じて新しい物事の見方に気づく	.836	-.018	-.003	.700
外化-気づき	AL12	議論や発表を通じて自分の考えが偏っていることに気づく	.626	-.029	.334	.505
外化-内化	AL13	議論や発表を通じて、複数の視点から授業の内容への理解が深まる	.832	-.026	-.051	.696

因子間相関

	1		
0	1		
0	0	1	
			1

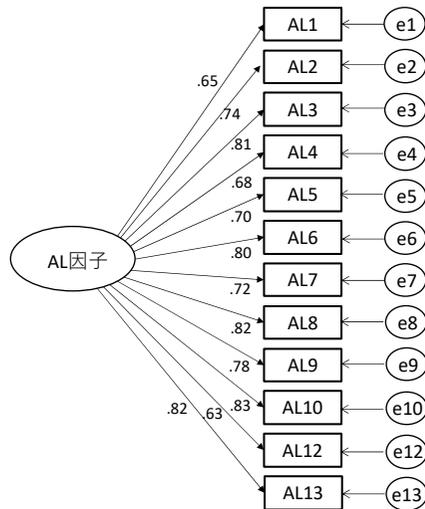
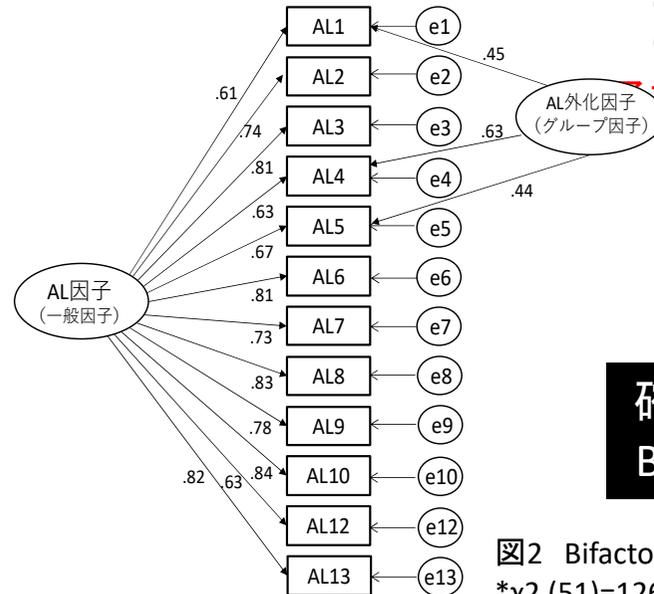


図 1 因子モデルの確認的因子分析

* $\chi^2(54)=3395.537, p<.001, CFI=.911, RMSEA=.115, AIC=3443.537$



この構造は「一般因子」として前提とした

クロンバックの α 係数

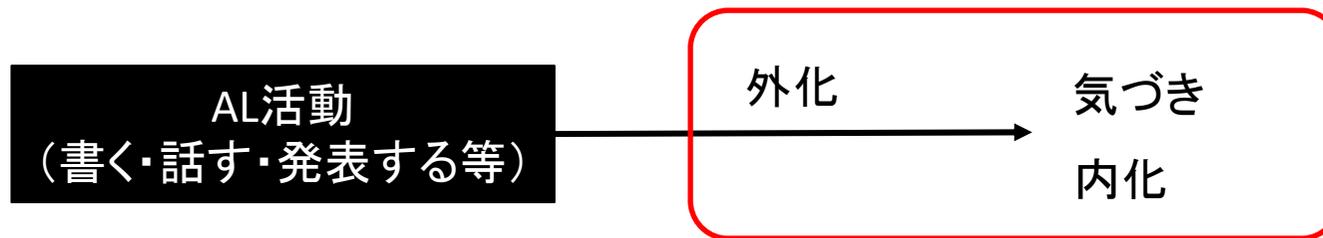
✓ AL12項目版 $\alpha=.938$

確認的因子分析の結果から
Bifactorモデルのほうが妥当

図2 Bifactorモデルの確認的因子分析

* $\chi^2(51)=1267.662, p<.001, CFI=.968, RMSEA=.072, AIC=1321.662$

(理論的まとめ)



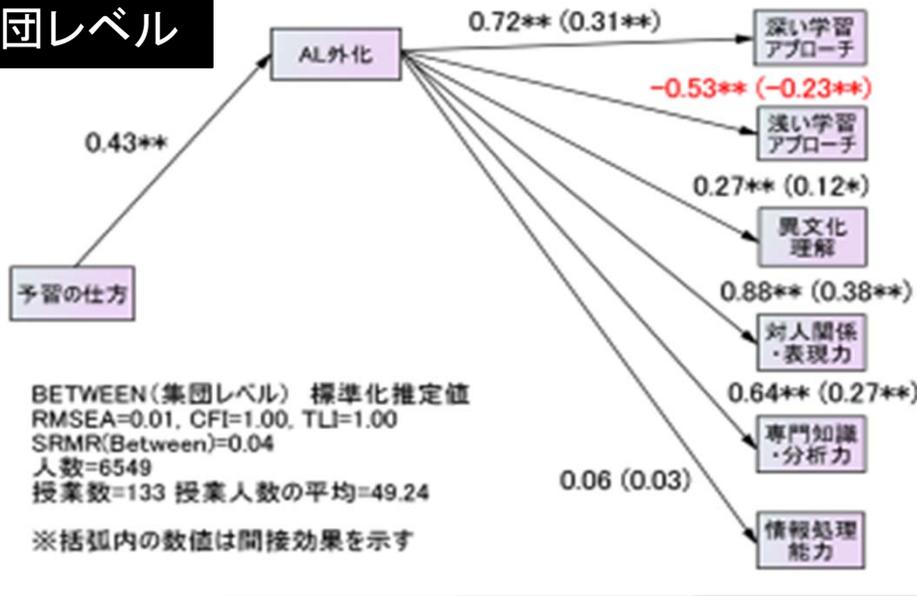
データに基づけば、この3つは一体化！

(アクティブラーニングから深い学びへの接続)

- 内化 → 外化 → 内化 (森, 2017)
- 個人 → 協働 → 個人 (関谷, 2015; 溝上, 2017)
- ✓ 外化段階で「**わかったつもり**」をつくるのが、次の内化への下準備となっている。個人の深い学びの実感となっている。
- ✓ 「はいまわる活動主義」「活動あって学びなし」は、外化を単なる活動としかとらえていない。活動にともなう主観的な学習活動の意義をとらえていない。

AL外化は「平均」で見れば集団レベルでも個人レベルでも効果はある
 個別の教授学習のデザインや実態をふまえたさらなる効果検証をおこなっていく必要あり

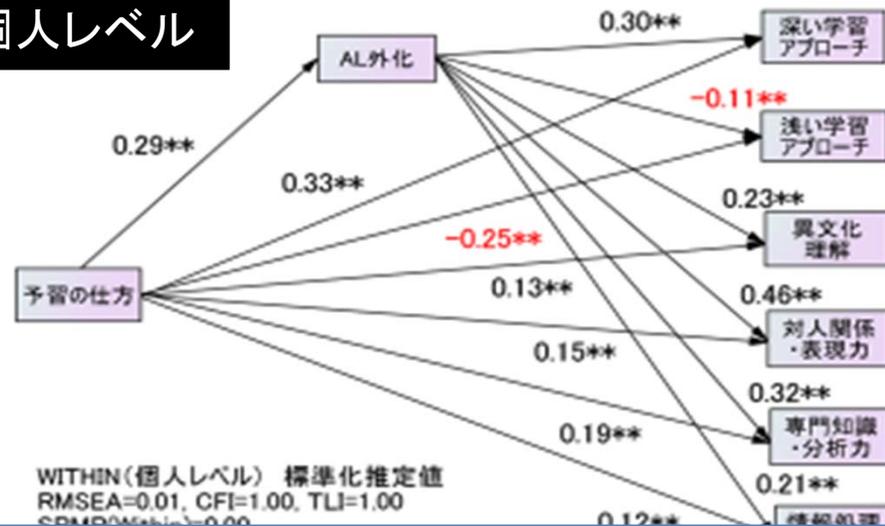
集団レベル



- 集団レベルでは、“予習の仕方”が“AL外化”を媒介して効果が得られる(という結果)
- 個人レベルでは、“予習の仕方”や“AL外化”がよければ効果が得られる(という結果)



個人レベル



- 授業への示唆
 “予習の仕方”と“AL外化”に共にしっかり取り組ませるAL型授業が、学生の学びと成長を促す。
- 学生個人への示唆
 “予習の仕方”や“AL外化”にしっかり取り組む学生が、学び成長する。

紺田広明・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳・森朋子・溝上慎一 (投稿中). アクティブラーニング型授業がもたらす効果—マルチレベルSEMによる実証的検討—

本日の内容

- アクティブラーニング理論と施策の展開(復習)
- AL研究プロジェクト(大学)から明らかになったこと
- 高校のAL型授業の推進を見て



(桐蔭学園高校の授業より)



(桐蔭学園小学校の授業より)

リベンジの授業



- 傾聴の姿勢
- 前に出てきて発表。声も大きい

([山形県立] 庄内総合高校)

机・椅子を何度も動かす



([愛知県私立]名城大学附属高校)

- グループワークの形態で説明を聴くときには体を前に向ける

姿勢や傾聴が出来るクラスでは学びが主体的に成り深くなる



([愛知県私立]名城大学附属高校)

他にもいろいろな学校のAL型授業への挑戦をしています



([京都府] 花園中学高校) (静岡市立高校、清水桜が丘高校ほか) (金沢市立工業高校)



([神奈川県] 港北高校)

(長崎東中学高校)

([滋賀県] 玉川高校)



(大阪府立)岸和田高校ほか
多数

([大阪府] 帝塚山学院中学高校)

ウェブサイトで全国に紹介してもらっています (私もコメントしています)

[AL関連の実践]

【AL関連の実践】 (New は過去1週間以内の更新ページにつけてあります) 道上慎一のホームページ

2017年9月26日掲載 **【中学校】** 井藤由美 (関西学院千里国際中等部・高等部) (組織的実践)
「関西学院千里国際中等部・高等部 (SIS)の取り組み-「21世紀型教育の実験校」としてのこれまでと今後-」
New

2017年9月26日掲載 **【高校/数学】** 廣井望 (花園中学高等学校) (授業実践)
「アクティブな取り組みを通じて数学的な思考力をつける授業」 New

2017年9月24日掲載 **【高校/数学】** 宮田隆徳 (名城大学附属高等学校) (授業実践)
「ScrapboxとYouTubeを使用した反転授業」 New

2017年9月15日掲載 **【中学/美術】** 橋本術佳 (同志社中学校)・竹内晋平 (奈良教育大学) (組織的実践)
「同志社中学校・芸術科におけるアクティブラーニングの試み-基礎的体験の言語化を通じた芸術的発展的理解-」

2017年9月9日掲載 **【中学校】** 筒井規子・道中博司 (帝塚山学院中学校高等学校・教育研究プロジェクト) (組織的実践)
「帝塚山学院中学校高等学校-アクティブラーニング型授業を洗練させる取り組み-」

2017年9月6日掲載 **【高校/英語】** 馬場豊 (花園中学高等学校) (授業実践)
「積極的な「個-協同-個」の学習を目指した授業」

2017年9月5日掲載 **【高校/宗教】** 森信明 (花園中学高等学校) (授業実践)
「習の具現化を目指したアクティブラーニング授業」

2017年8月13日掲載 **【高校/英語】** 乾菜摘 (帝塚山学院中学校高等学校) (授業実践)
「アクティブなインプット学習から協働学習につなげる授業」

2017年8月12日掲載 **【中学校/英語】** 竹村紗季 (帝塚山学院中学校高等学校) (授業実践)
「協働学習と発表で英文法の知識を定着させる授業」

2017年7月25日掲載 **【中学校】** 木村浩一 (花園中学高等学校・教務部長) (組織的実践)
「花園中学高等学校 授業改革の取り組み-アクティブラーニング型授業導入を目指して」

2017年5月23日掲載 **【高校】** 沼津市立沼津高校・富士市立高校・静岡市立清水桜が丘高校・静岡市立高校・浜松市立高校 (組織的実践)
「静岡県内の市立高等学校5校によるアクティブラーニング研究」

2017年5月23日掲載 **【高校/国語】** 川崎一枝 (静岡市立高等学校) (授業実践)
「ワークシートにおける「個-協同-個」の学びの構造化」

<http://smizok.net/education/>

【AL関連の実践】 **【高校/数学】** アクティブな取り組みを通じて数学的な思考力をつける授業
廣井望 (花園中学高等学校)

(京都市私立) 花園中学高等学校のウェブサイト

(奥上のコメントは最後にあります)
対象授業

授業：高校1年生 数学1(3単位)
教材：サクシード 数学1+A
実践クラス：高校1年生 特進Aコース Bグレード2.8名

第1節 授業の目標

特進Aコースの数学の授業は習熟度別に行っている。Bグレードは下位グレードであるため、数学が苦手な生徒が多い。授業では教師の説明を聞き、練習問題を解くときにペアワークやグループワークを取り入れることで知識の定着を図っている。また、単元ごとに行う復習ではグループワークを行っている。教科書やノートに頼らず、自分たちの知識を持ち寄り、話し合い、正しい答えを導くために活動させている。受験で必要とされる数学の力だけでなく、社会で生き抜くための考える力・自分の伝えたいことを相手に伝える力・グループの中で引っ張っていく力をつけさせたい。

第2節 授業の流れ

① 前回の内容の小テスト(4分)→ペアで答え合わせや内容の確認(2分)
ペアでの確認後に解答を配布する。

問題

- 授業の内容を定着させるように復習をする習慣をつける。
- ペアワークでは自分の解答を相手に説明することで知識を定着させる。

② 例題解説(7分)
教師が黒板で例題の解説をする。理解しているか一区切りごとに確認する。分からない生徒がいれば、どこまで理解しているか、どこから分からないかを答えさせ、確認する。

③ 練習問題(5分)
問題

- つまづき場合があるので時間は短く設定しておく。
- 手が動かない生徒が出てきたらヒントを出す。

④ ペアワーク(5分)
①で行った内容を確認し、2人の答えが一致することを目指す

問題

- 生徒の理解を深める。

⑤ 答え合わせ(3分)
③・④の活動の間に生徒が1人でできそうなところまでは黒板に書いておく。残りの部分は生徒を出てながら説明し、最後に解答を配布する。生徒の様子を見て③の時間は調整する。
*基本的には例題を2問扱うので③～⑤をくりかえす



図1 授業風景

【高校/数学】アクティブな取り組みを通じて数学的な思考力をつける授業
廣井望(花園中学高等学校)(2017年9月25日掲載)

ご清聴有り難うございました & 本日はご参加有り難うございました

9/30
開催決定!

アクティブラーニング型授業 高校と大学による事例報告会

@関西大学梅田キャンパス

アクティブラーニング型授業効果検証プロジェクト（代表 溝上慎一）では、2014年度より大学を中心にAL型授業の効果検証をおこなっています。本報告会ではプロジェクト協力者とそこで得られた知見を共有するとともに、今後の高大接続を視野に入れて、高校のAL型授業の事例も報告します。会場の都合上、定員120名の限定となりますので、ご希望の方はお早目にお申込みください。

日にち：2017年 **9月30日（土）**

時間： **13:00～17:30**

プログラム：

- 開会の挨拶 森朋子（関西大学）
- AL型授業の効果検証 ～中間成果報告～ 紺田広明（関西大学）
- 大学からの実践報告 関田一彦（創価大学）
- 高校からの実践報告 佐藤透（桐蔭学園）
- ポスター発表と交流



大学側発表者：奥田阿子（長崎大学）、小林和広（島根大学）、
小山理子（京都光華女子大学短期大学部）、田上正範（追手門学院大学）、
多田泰紘（関西大学）、千葉美保子（関西大学）、溝上慎一（京都大学）、
山田嘉徳（大阪産業大学）

高校側発表校：花園学園中・高等学校、帝塚山学院中・高等学校、大阪府立岸和田高等学校、
山形県立庄内総合高等学校、静岡市立5校（静岡市立高校、清水桜が丘高校ほか）、
長崎県立長崎東高等学校、神奈川県立港北高等学校

●総括講演 溝上慎一（京都大学）
●開会 森朋子（関西大学）

場 所：関西大学梅田キャンパス（大阪駅/梅田駅から徒歩5分）
参加者：プロジェクト協力者およびAL型授業に興味がある学校教育関係者
定 員：120名（先着順となります）
後 援：関西大学教育推進部
申し込み：https://reas2.code.ouj.ac.jp/reas/q/50422

*本研究会は、大学教育学会からの課題研究助成（H27～H29）「アクティブラーニングの効果検証」（代表者：溝上慎一）、科学研究費基盤研究（B）（H28～H30）「学習成果に結実するアクティブラーニング型授業のプロセスと検証の実証的検討と理論化」（溝上慎一代表：課題番号16H03075）の助成を受けておこなわれています。

【問い合わせ先】森朋子（関西大学）morit@kansai-u.ac.jp

• 来年この高校と大学の同時実践交流会を、もっと大きくして開催致します。またお会いしましょう！

• 案内はチューリップMLや溝上ウェブサイトをご覧ください。

<http://kyoto-u.s-coop.net/tulip/index.html>

講師プロフィール

<http://smizok.net/>

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2000年講師、2003年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。2014年より教授(現在に至る)。大学院教育学研究科兼任。教育アセスメント室長。京都大学博士(教育学)。



日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、『*Journal of Adolescence*』Editorial Board委員、公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、学校法人桐蔭学園教育顧問、中央教育審議会臨時委員、大学の外部評価・AP委員、高校のSGH/SSH指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と教育実践研究(学習と成長パラダイム、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学－他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ』(2010有斐閣選書、単著)、『高校・大学から仕事へのトランジション－変容する能力・アイデンティティと教育－』(2014ナカニシヤ出版、編著)、『活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジション－』(2014東京大学出版会、編著)、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(2014東信堂、単著)など多数。